

花泉支部 社協情報誌

特集号

発行 令和5年3月25日

一関市社会福祉協議会花泉支部

一関市花泉町老松字水沢 193-1

電話/FAX 0191-82-4002

□ヘルパーセンター花泉 電話 0191-36-1226

□介護支援事業所花泉 電話 0191-36-1226

□ケアプランセンター花泉 電話 0191-36-1226

□はないずみ地域包括支援センター

電話 0191-36-3021

□老松介護予防センター 電話 0191-82-5559

令和4年度花泉町福祉作文コンクール 入賞者のご報告

令和4年度の福祉作文募集は町内の各小学校、花泉中学校、花泉高等学校では全校生徒で取り組まれ、全体で146点の応募をいただきました。作品の展出にあたりご指導いただきました各学校はもとより、保護者の方々、民生児童委員並びに地域福祉に携わっていただいている皆様のご理解とご支援に心から御礼を申し上げます。

今年度は新型コロナウイルス感染者数の減少により、優秀作文表彰式と朗読発表会を開催したところであり、またコミュニティFMあすもによる広報を行い、そして応募いただいた全作品を冊子にまとめ応募者並びに関係者へ配布したところであり、

作文からは、新しい小学校で沢山の友達ができて欲しいとの期待、認知症の祖母への声かけも介護の一つ、動物愛護による人間との共生、障がいを持つ人と共に生き生きと働ける社会へ繋がる思いなど、普段の生活や体験したことから自分はどのように考え、行動すべきかを表現しています。

社会人となっても作文に表した素直な思いを大切に、将来にわたって一歩踏み出す勇気を持ち続けることを希望するものであります。

今回は社協情報誌特集号として、8つの最優秀作品を全文掲載しお届けします。



この広報は、皆様からいただきました共同募金の配分金の助成を受けて発行しております。

大切な友だち

涌津小学校 三年

佐々木 心葵

わたしが、涌津小学校に入学して、はじめてお話をしたのが、いわぶちらなさんです。

らなさんが

「よろしくね」

と言ってくれて、きんちようした心がほかほかしたことをおぼえています。

涌津小学校に入学してから、二週間ぐらいたち、友だちがいっぱいできてうれしかったです。いっしょにあそんだり、勉強したりして毎日が楽しかったです。

一カ月ぐらいたつと、お話もたくさんできて、いやなことわすれちゃうくらいでした。家にかえると、学校でなにかあったかとか友だちができたことを、パパとママに話しました。勉強はむずかしかったです。勉強はむずかしかったです。たけど、楽しい毎日でした。

学校からかえる時は友だちといっしょにかえったり、漢字をならうと、友だちと漢字で文をつくらたりするのが楽しかったです。

二年生になると、三年生や四年生にもお話しできるようになりました。

遠足の時はいろいろな動物とあそべてうれしかったです。

友だちとなかよくなれたのは、学校へ行くと

「おはよう。」

と、あいさつをすると、えがおがいっぱいになって心がほかほかします。

これからも、みんなで力をあわせて、なかよく、元気な学級にしていきたいです。

そして、新しい小学校になったら、それでも元気いっばいの学級にしたいと思います。「どんな校しゃかな。」とか「どんな教室かな。」「校ていが広いといいな。」というところが頭にうかぶけど、「ほかのみんなもおなじことを考えているのかな。」と思います。一番気になるのは「友だちができるといいな。」ということなんです。

一人で考えてばかりいるので、みんなに聞いてみようと思えました。そのことを家にかえてからママに話しました。ママは「きつとたくさん友だちがで

きるよ。」
と言ってくれました。
わたしは、うれしくなりました。新しい学校でもたくさん、大切な友だちができるといいなと思います。

笑顔の大切さ

金沢小学校 五年

金田 悠希

去年、大好きな家族がなくなりまし。ぼくは、なくなったそう祖母とは幼稚園までいっしょにくらしてました。いっしょに散歩したり、食事をしたり、とても楽しい思い出がたくさんあります。

しかし、そう祖母は、まだ歩けるときに、アルツハイマー認知症という病気にかかり、少しずつ自分でいろんなことができなくなっていました。例えば、物忘れがひどくなったり、トイレの場所がわからなくなったりしました。そして、食事をしたのに「食事をしていない」と、怒ってしまうこともあり



ました。時間も分からなくなっていました。

その当時、家では、福祉用具を使っていたと家族から教えてもらいました。たくさんある中からそう祖母は、歩行補助杖、車椅子、介護用ベッド、床ずれ防止用具を使っていたそうです。最初は家の中でも歩いていたのにベッドに寝ていることが多くなっていきました。いつの間にか笑顔が減っていったそうです。笑顔が減ってしまったそう祖母は、どんなことを思っていたのか、僕は考えました。

その当時、幼稚園だった僕は、何にもできなかったけれど、そう祖母とたくさん一緒に話していました。お話をしているときは、とても笑顔で話してくれたことは覚えてい

がいたら、自分から積極的に笑顔で声をかけたいと思えます。これが、今の僕にできる福祉だと思えます。「福祉」という言葉の中に、「幸せ」という意味が込められていると僕は感じました。

感謝の気持ち

花泉中学校 三年

高村 風音

私の祖母は今、骨折して手術をし入院しています。そんな大変な状況だからこそ、私は祖母に今までしてもらったことを思い出しました。

私の家と祖母の家は隣で近いです。いつも会っていつもいるのが当たり前になっていて、してもらったことに気づいていなかった事があります。例えば、毎年誕生日には欠かさずおめでとうと言って図書カードをくれます。そこに、本をたくさん読んで育ってほしいという祖母の思いがあると思うと、と



ても嬉しい気持ちになります。そして、家が近いのでいつも連絡せずに急に遊びに行っています。そんなときでも、笑顔で私を迎え一緒に過ごしてくれくれます。その優しい笑顔に、私もいつも笑顔になります。また、何より私の味方してくれる事です。どんな時でも私のことを応援してくれています。応援してくれている人がいるのはとても嬉しいし、心強いです。

このように、私が祖母に生まれていることはたくさんあります。だから私は、これからは自分も何かしてあげられるようになりたいと思えました。祖母は、手術をして治るけれどリハビリでどのくらい以前のように歩けるようになるかはわからないそうです。そのため、家に手すりを

つけるなど工夫をしていかなければなりません。そこで、私にも何かできることはないかと考えました。そして、一緒に散歩して前のように歩けるまで手伝おうと思えました。しばらく入院してリハビリはしますが、病院の中はずっとしていると気持ちも沈んで、あまり外を歩きたいと思わないかもしれません。でも、誰かと一緒に楽しく散歩できたら気分が変わってまた出かけたと思うようになれると思います。今までもらっていた事があるからこそ、少しでも祖母の力になりたいと思います。

そして、祖母が入院中のままお盆をむかえました。亡くなった祖父が一年に一回家に帰ってくる日です。誰もいない家に帰るのは寂しいだろうなと思、私は祖母の家に一人で泊まりました。するとそこには、今まであまり気にしていなかった、今だから見える祖父の暮らしていた形跡がわかりました。家族の写真がたくさんあり、その中に私の写真もたくさんあったので嬉しかったです。お盆に家で

僕にできる事

花泉高等学校 一年

川嶋 晟弥

「あんちゃん、あの犬、犬の散歩してるよ」と、弟が言ってきた。僕は、とっさに弟の口に手をやった。弟は「やめてよ」と怒ってい

認知症の人は、できなくなる事がたくさんあります。その祖母は、笑顔でいつも笑っていて、食べるのが大好きで、畑仕事など家の仕事をたくさんしていた人だったそうです。それが少しずつできなくなるのは、本人が悲しくて、つらかったらどうと思いた。小さい子もだった僕は、一緒にお話しすることしか出来なかったけれど、一緒にお話ししたことで、笑顔だけは取り戻せたのかなと思いました。そう祖母のように、生活していきいけないことがあったら、ちょっとしたことでも声をかけてあげたり、分かりやすいようにゆっくり短く、かんたんに話しかけたりするだけでも相手は安心すると思います。声がけもりっぱな介護の一つだと感じました。また、相手に安心感を持ってもらえないように、失敗を怒らないで、ゆっくり優しい言葉で話しかけることが大切だと思います。そして、一人にしないことも安心感をもってもらえるとと思います。

家族に限らず困っている人た。犬の散歩をしているあの人は、視覚障害者だった。弟は何も分らず、ただ純粋に見たままを言葉にしただけだった。でも僕はとっさに、あの人に聞こえてはならないと思った。弟はわけもわからず、怒ったままだったから、僕はその時、今、自分が知っている事だけを弟に伝えた。「あの人は、目が見えないから、犬がその人の目になって外を歩いているんだよ。絶対に、あの人の前をじゃましたり、犬に声をかけたり、さわろうとはしてはいけないよ」と優しく伝えた。弟は、理解をしてくれたかは分からないが、「わかった」と言っていた。あの説明でよかったのだろうか？

僕や弟、妹たちは、五体満足で産まれてきた。だからこそ、身体障害者について、わざわざ知ろうと思わないで生きている。でも、外を歩いていると、目が不自由で杖を使っている人、犬をつれて歩いている人、耳の不自由な人、手や足が不自由で杖や車イスを使用している人、さまざまな障害を持った人がいる。

忘れられない笑顔

花泉高等学校 一年
佐藤 美佳

「かわいそうだな」「大変だな」とは思うが、障害者の気持ちを考えて、必要か考えたことはない。そんな時、弟がむじゃきに言った事に對して、きかれるとマズイというあの時の自分のあせりがはずかしいと思つた。あたり前の事があたり前にできる僕たちでできる事、それは障害者が住みやすい世の中になる様に、健常者一人一人が障害に對して理解を深め、知識を得る事だと思ふ。そのためには、まず、何のために点字ブロックがあるのか、何のために点字があるのか、何のために音響式信号機があるのか、盲導犬への対応、白杖の役割など、少しでも良いから理解を持つ事が今の私たちにできる最低限の事だと思ふ。生きていくうえで、人間はそれぞれ不安は持っている。障害者は私たちに以上に、毎日不安だろう。

私は小さい頃とても人見知りでした。小学校の入りたては話せる子が片手で数えられるくらいの人数でした。月日が経つて友達も出来、馴染むことができたのですが、小学四年生の時に親の都合で転校しなくてはならなくなりまして。そこで私はまた一からやり直しかと悲しくなりまして。そして初めてその学校に行つて、皆んなに会う日と思つて、私は凄く胸がドキドキしながら教室に入りまして。そしたら黒板に「さとうみかさん。これからよろしくお願ひします。」という文字と共に皆んなの名前が書かれた磁石や絵が沢山書いてあつて今にも泣きそうだったので、それよりも私は自己紹介の事でいっぱいでした。私はここでも人見知りを発動し、小さい声で自己紹介をしてしまいました。そして先生に自分の席を教えてもらい、無事朝の会はおわりまして。



その後には続々と女の子達が私の周りに集まって話しかけてくれてとても嬉しかったです。そしてここからが本題です。帰り一人で歩いていたら一人のおばあちゃんに声をかけられました。私はその時頭は明日のことではいっばいで一回目に話しかけられた時は気付くことができませんでした。二回目でおばあちゃんの声に気付けたのですがおばあちゃんか

「大丈夫？元気なさそうに見えるからおばあちゃん心配で声かけちゃつた。」と言われ、一日我慢していた涙が沢山出てきておばあちゃんに困つていようでした。けれど私は止めようとしても涙が言うことを聞きませんでした。私が泣き止むまでおば

動物愛護について

花泉高等学校 二年
畠山 愛唯梨

動物はなぜ殺処分されるのか。ネット上では、人間に危害を及ぼすおそれがあるから、不要となったからとかかかっている。これらは人間の勝手な感情と無責任な心が原因であると思ふ。

私が小学生の時もらい受けた猫は、殺される真近だった。あと一日後には、川へ捨てる予定だったそう。小学生の私にはその行動の意図を読み取ることも理解することもできなかった。中学生になり大好きだった兔が旅立った。その日、私は、命の儚さと今を生きる命の大切さを知つた。それから私は命について考えるようになった。命とは誰にでも等しく平等に与えられるものであり、その尊さは変わらない。しかし、現代では、人間に害を与える命は無条件に消されている。そんな現状を私は変えたい。

保健所で死を待つだけの動物達に生きる意味を与え、社



始めはこれらの意識が希薄でしたが、日々赤ちゃんと暮らしていく中で気づくことができました。育児を経て、自身を成長させることができたと感じます。

子どもを育てるということは、生半可な覚悟ではいきません。自分も家族の一員であるということを強く意識することが大切です。苦労はかかりますが、その分子どもの笑顔に繋がります。

また、子どもの前で悪い影響を与える発言や行動に気をつけることも大切です。日頃の自分が家ではより強くでてしまうので、場所や空気を考えたアクションを行うことが必要だと思ひました。弟の世話や親の背中を見ていく中で、たくさんのお話を学びました。私自身もいつか自分の家族を持つときが来たらこれらの経験と反省を生かし、幸せな家庭を築くことができるように、日頃の生活から精進していきたいと思ひました。

会に動物達の必要性を教えた。その方法の一つとして、保護犬を指導し盲導犬や聴導犬、介助犬、アニマルセラピーとしての社会貢献が挙げられる。また、警察犬として人命救助という実践を挙げ人々から感謝されている元保護犬もいる。動物達の能力が認められてきている。今なぜ殺処分は減らないのか。それは、能力をうまく活用できていないからだと思う。保護犬を指導し人の役に立たせたくても、指導者が居なければ殺処分が減ることはない。であれば、指導者を増やせば良い。たくさん動物が能力を活かすことができずに死んでいることを世の人間達に知ってもらえば数人程度は関心を持ち殺処分ゼロに取り組むだろう。人間が動物を殺処分から救うことで、時を経て、違う形で人間を救ってくれる。そこで利害関係が生まれる。人間と利害

関係を持つことで、動物達は今を生きることを社会から認められる。人間の作り上げたこの理不尽な世界で動物達には生きる意味を与えるべきだと思ふ。また、動物の権利について再度確認する必要がある。動物への虐待や遺棄は法律違反であり、動物の健康や安全の保持を害するものは加害者である。動物も人間と同じように命があり、感情もある。子が親に虐待をされ苦しむように動物も飼い主から虐待を受ければ苦しむもの。動物も我々と同じ生き物だと認識し、命のおもさ、尊さに変わりはないと大切にしてほしい。今後、法律面や買取面、譲渡面などで動物が暮らしやすい環境づくりをしていくことが大切だと思ふ。

十四歳離れた弟

花泉高等学校 三年
佐藤 海斗

私には、十四歳年の離れた弟がいます。もう一人二つ下

の弟がいますが、物心ついたときから一緒に暮らしていましたが、二人目の弟ができたときは、何か不思議な感じがしました。ただ漠然と弟がもう一人できるとしか考えていませんでした。生後間も無い赤ちゃんと呼びました。弟が甘く考えていました。弟が家に初めて来たときに、赤ちゃみをよくしました。赤ちゃんは免疫が未だ発達していませんので、日頃からより綺麗に家の中を保つことが大切だとわかりました。赤ちゃんは興味を持った物をとりあえず口に含もうとしてしまうことがあるので部屋や玩具の除菌を心がけました。赤ちゃんの行動を一つ一つ見守ることが必要なので気疲れなどのストレスを感じる事が多くありました。ですが苦労をかけて大切に育てることですくすくと健康で安全に成長していく姿を近くで見ることができました。私は当時学校や部活動などが忙しく家にいられるときしか弟の世話をすることができなかつたので、片時も離れず弟の側にいる母の苦労は私には想像のつかないもの

だつたと思ひます。出産して間も無く退院、それから家事や弟の世話など、母体には精神的肉体的な負担が大きくかかるということが近くで母を見てとても感じました。母親をサポートするのでは無く、家族全員が協力して育児を行うという意識が大切だと思ひます。この意識が足りていないと母親に負担が大きくなる他、育児ノイローゼ、それらのストレスから育児虐待といった問題に繋がると思ひます。未だ日本では、母親が中心に育児を行うといった古い価値観から来る習慣があるように感じます。家族全員が一丸となり、家事育児を行うことで、より円満な生活を送れると思ひます。家庭環境とは赤ちゃんの人格形成に大きく関わるのでとても重要です。

障がいを持つ人と共に働ける社会

花泉高等学校 三年

菅原 捷子

私の家には、二週間に一度美味しいお豆腐が届く。インターホンが鳴り、外へ出ると

明るいあいさつが聞こえる。お豆腐を持って来るのは決まって二人。ベテランの販売員と、障がいを持つ販売員だ。

このお豆腐屋さんでは配達はもちろん、お豆腐を作る仕事にも障がいを持つ人が携わっている。このお豆腐屋さんに限らず、私の身の回りには、障がいを持つ人が働いているところがある。

一つ目は『やまじん』という食堂だ。私は時々、父の知り合いが経営している食堂に連れて行ってもらったことがある。そこでは、厨房でお皿を洗う人はもちろん、注文を取ったり、料理を運んだりするのも障がいを持つ人が行っている。いつ行っても「いらっしやいませ!」という元気な声がかえり、働いている姿が、とても一生懸命で、私自身、

行く度に元気をもらっている。時々、お客さんと世間話をしていて様子を見て、私は自然と笑顔になった。障がいを持っていて人同士でなくとも何気ない話を笑顔でする。そこから、障がいの有無が接客や会話の障害にはならないのだと感じた。

二つ目は『さくら園』だ。さくら園は、花泉高校に定期的にパンを売りに来ている。そのため、花泉高校の生徒なら誰もが知っていて、お世話になったことがある人も多い。ここでは、パンを作ることをはじめ、パンの販売も障がいを持つ人が行っている。さくら園のパンは生徒に人気で、買いに行くともう既にな

いこともある。

私が、障がいをもつ人の働く姿に注目したのは、障がいを持っていて気がな

たからではない。障がいを持っていての人が、身近なところで働いていたことに改めて気付いたからだ。そして、それに気付いたとき、障がいを持つ人で働きたいと考えている人は、まだまだたくさんいるのではないかと思

った。しかし、障がいは特性や程度も様々で、自分の特性に合う仕事を探さなければならぬため、障がいを持たない人より就職することが難しい。障がいを持った人が働きたいのに働けないという問題の背景は、これだけではない。例えば、障がいを持っていることを可哀想だと考え、「大変だから就職しない方がいいのではないか」と周りが言うことで、本人が働きづらくなること、障がいを持つ人が働ける場所が少ないことが挙げられる。この二つは、障がいに対する認識の誤りが生んだ問題だ。障がいは個性であり、人によって得意不得意があるのは私達と同じである。障がいがあるから働けないのではない。不得意な部分を補うことができれば、障がいを持つ人も働きやすくなるのだ。

障がいを持った人が働ける場所を増えているが、まだまだ足りない。障がいを正しく理解し、障がいを持った人と共に、生き生きと働ける社会になることを私は強く願う。

小学校低学年の部

小学校高学年の部

中学校・高校の部

最優秀賞 <<1名>>
 涌津小学校3年 佐々木心葵

優秀賞 <<2名>>
 花泉小学校2年 さかいしおり
 老松小学校2年 あべこたろう

最優秀賞 <<1名>>
 金沢小学校5年 金田 悠希

優秀賞 <<3名>>
 涌津小学校4年 藤澤みちる
 油島小学校4年 川島 颯斗
 花泉小学校6年 菅原 颯

最優秀賞 <<6名>>
 花泉中学校3年 高村 風音
 花泉高等学校1年 川嶋 晟弥
 花泉高等学校1年 佐藤 美佳
 花泉高等学校2年 畠山愛唯梨
 花泉高等学校3年 佐藤 海斗
 花泉高等学校3年 菅原 捷子

優秀賞 <<8名>>
 花泉中学校1年 川嶋 萌恵
 花泉中学校2年 佐藤 瑠菜
 花泉高等学校1年 中村れおな
 花泉高等学校1年 佐藤 和哉
 花泉高等学校2年 沼倉 美里
 花泉高等学校2年 加藤 快人
 花泉高等学校3年 加藤 夢琴
 花泉高等学校3年 千葉美桜加

入賞者一覧 <<21名>> (敬称略)

小学校低学年の部

最優秀賞 <<1名>>

涌津小学校3年 佐々木心葵

優秀賞 <<2名>>

花泉小学校2年 さかいしおり

老松小学校2年 あべこたろう

小学校高学年の部

最優秀賞 <<1名>>

金沢小学校5年 金田 悠希

優秀賞 <<3名>>

涌津小学校4年 藤澤みちる

油島小学校4年 川島 颯斗

花泉小学校6年 菅原 颯

中学校・高校の部

最優秀賞 <<6名>>

花泉中学校3年 高村 風音

花泉高等学校1年 川嶋 晟弥

花泉高等学校1年 佐藤 美佳

花泉高等学校2年 畠山愛唯梨

花泉高等学校3年 佐藤 海斗

花泉高等学校3年 菅原 捷子

優秀賞 <<8名>>

花泉中学校1年 川嶋 萌恵

花泉中学校2年 佐藤 瑠菜

花泉高等学校1年 中村れおな

花泉高等学校1年 佐藤 和哉

花泉高等学校2年 沼倉 美里

花泉高等学校2年 加藤 快人

花泉高等学校3年 加藤 夢琴

花泉高等学校3年 千葉美桜加

応募総数：146点

小学校1年= 6点

小学校2年= 4点

小学校3年= 6点

小学校4年=12点

小学校5年= 4点

小学校6年= 4点

中学校1年= 3点

中学校2年= 3点

中学校3年= 8点

高等学校1年=30点

高等学校2年=31点

高等学校3年=35点

